**斎藤　せつ子 （さいとう・せつこ）**

**１、プロフィール**

小説家。昭和36年、同人誌「土偶」創刊に参加。９号掲載の「健やかな日常」が第13回新潮社同人雑誌賞を受賞。同作はまた第56回（昭和41下半期）芥川賞の候補となる。

＜生没＞

1930（昭和５）年４月17日 ～　2018（平成30）年７月９日

＜代表作＞

短編小説「おんな川」「健やかな日常」「はてはての」「遠い近景」

長編小説「水の口吻け」

＜青森との関わり＞

黒石市生まれ。昭和37年、月刊タウン誌「北の街」を創刊。出版業をおこし、社主として地方文化向上に貢献。

**２、作家解説**

小説家。昭和５年（1930）黒石市生まれ。黒石高等女学校から官立青森青年師範学校に進む。太宰治の心中事件にショックを受け、読書も太宰治、坂口安吾、石川淳、織田作之助等の新戯作派に惹かれる。学校中退。そして結婚、出産。思わぬ夫の闘病生活。暮らしのためにさまざまな職業につく。持ち前のバイタリティーで生活の修羅場をきりぬける。

昭和34年「青森文学」に入会。数編発表。習作といえる作品ながら作家的素質の光るものがあった。「松屋敷」はその頃の作品で、津軽の旧家にまつわる因縁・因果話である。昭和36年、同人雑誌「土偶」創刊に参加。「おんな川」（「土偶」８号）が「文学界」（40年11月号）同人雑誌ベスト５に選ばれる。「健やかな日常」（「土偶」９号）で昭和41年12月新潮社同人雑誌賞受賞。同作品が第56回芥川賞（昭和41下半期）候補作となる。井伏鱒二、尾崎一雄に高く評価された。続いて「新潮」に「はてはての」（昭和46年３月号）、「遠い近景」（昭和52年３月号）を発表する。「遠い近景」も特異な素材で、複雑な人間関係を的確に抑制のきいた筆致で描いている。

また、月刊誌「きたおうう」に「水の口吻け」（昭和51年７月～昭和52年6月）、「陸奥新報」に「風の視線」（昭和62年３月～７月）をそれぞれ連載、好評を博した。彼女には小説家のほか、もう一つの貌があった。昭和37年７月、月刊タウン誌「北の街」を創刊。「同人誌とは違う立場から、地方でものを書く人々に発表の場を提供したい」という念願が主旨で、さらに出版業をおこした。それが開花し、「北の街」は50年を超える誌歴を有し、平成30年7月現在671の号数をかぞえた。北の街社主として地方文化の担い手として、その向上に大きく貢献した。

**３、資料紹介**

〇「健やかな日常」（雑誌「土偶」第９号掲載）

雑誌

1966（昭和41）年４月１日

210mm×145mm

昭和41年、同人雑誌「土偶」（９号）発表の短編小説。「私」のヨロメキ現場が夫におさえられ、ゴタゴタし、騒動がおさまるまでの記である。この種の題材にみかけるしめっぽさが全くない。「私」はまことにユニークな造型である｡結末も心憎いほど利いている｡